

# 救援活動 隣人として

ともに生きて

賀川豊彦 活動開始100年

1923(大正12)年9月1日、南関東を中心に大地震が発生した。関東大震災である。翌2日、新聞で知った賀川豊彦は「すぐ被災者の救済活動に当たらなければ」と決意。その日午後に神戸港から出港し、4日朝、横浜港に着くと、徒歩で東京に急いだ。

日比谷の臨時震災救護事務局に着くと、現金や物資、衣類が不足していた。すぐに神戸に戻り、妻ハルやボランティア組織「イエス

## ボランティア

団」が集めた古着や薬品類を届けるとともに、約1カ月間、西日本各地で講演し、募金を集めた。

10月、再び東京へ向かった賀川は最大の被災地・本所(東京都墨田区)にテントを張って、炊き出しや入浴サービスなどを行った。仮設の無料診療所や職業紹介所などもできた。その後も賀川は東京にとどまり、社会事業を進めた。

◇ 神奈川県立保健福祉大学名誉学  
長の阿部志郎(83) 〓 神奈川県横須

⑧

## 2度の震災 きずな時超え

賀市Ⅱが賀川と初めて会ったのは昭和10年代、旧制中学1年の時。道に迷って東京・渋谷の自宅に来た賀川を、目的の講演会場まで案内したという。「教えてくれてありがたう。いい子だね」と褒められたことが忘れられない」

阿部は、同大学や賀川の母校である明治学院大学(東京)で教壇に立ちながら、半世紀余り、社会福祉施設「横須賀基督教社会館」館長として、児童や高齢者、障害者福祉施設を運営してきた。

阿部は、賀川の震災救済活動をこう評価する。災害救助には、埋まった人などを救い出す「レスキュー」、衣食住を確保する「レリフ」がある。「普通はここで終わる」。だが賀川は医療や福祉、教育の施設を次々と設け、震災前の状況に戻そうと努力した。「リ

コンストラクション」。復興まちづくりと結びついたところに新しい希望が生み出された」

そして1995年1月17日、阪神・淡路大震災。

阿部は、児童養護施設や乳児院を運営する社会福祉法人「神戸真生塾」(神戸市中央区)の特別顧問を務める。職員1人が死亡、子どもたちは無事—との情報を受け、不足していた子ども向けの薬約6千を病院で調査してもらい、神戸に駆けつけた。

真生塾でも既に多くのボランティアが動き、救援物資が山積みになっていた。いち早く地元の商店が差し入れをしてくれていた。

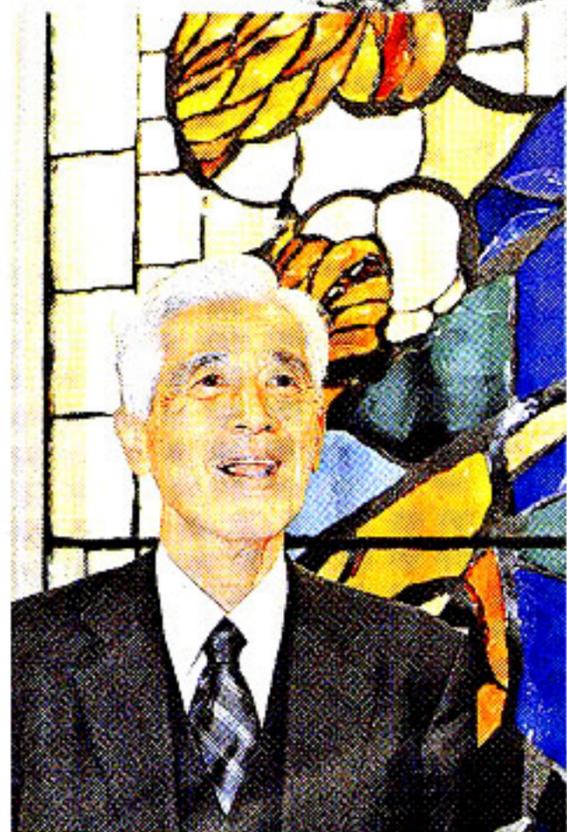
阿部は言う。「何日か過ぎてから組織するよりも、すぐに来て寄り添ってくれる方が被災者にとっ

てありがたかった。即応力がいかに大事かということだ」

「二度に幾十万の貧民を作った今日、隣人としての私たちは防貧に救済にお助けしなければならぬ。罹災者の困苦を自ら体験し、『眼』になりたい(抜粋)」

賀川が関東大震災の翌年に著した「地球を墳墓として」の一節だ。関東大震災の時は、関西学院の学生らも救護団を結成して駆けつけた。阪神・淡路大震災の時は全国から130万人以上のボランティアが集まり「ボランティア元年」といわれた。賀川の母校・明治学院大からも多くの学生が加わった。

兵庫から東京に届けた「隣人愛」は70余年の時を経て、兵庫に届けられた。 〓 敬称略 (河尻 悟)



① 関東大震災直後の東京で救済活動に当たる賀川豊彦(中央) 〓 1923年 ② 賀川豊彦献身100年記念事業東京プロジェクト実行委員長も務める阿部志郎さん 〓 神戸市中央区、神戸真生塾(撮影・岡田育麿)